

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

変貌するアフリカと生態人類学の新たな枠組み
(日本アフリカ学会第42回学術大会記念シンポジウム
報告. 講演III)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005866

講演Ⅲ 池谷和信

変貌するアフリカと生態人類学の新たな枠組み

1. 生態人類学と変貌するアフリカ

アフリカを対象にしたわが国の生態人類学は、1970年以來現在まで約35年の歴史がある。そこでは、主として狩猟採集民、牧畜民、漁労民そして焼畑農耕民のように自然に強く依存してきた人びとが研究対象に選定されてきた。現在、調査地域は拡大するとともに調査テーマは多様化して研究者の数は増大してきた点からすると、生態人類学は大きく発展してきた感がある。

ところがその一方で、過去35年間においてアフリカの人びとの暮らしは大きく変貌してきた。どんな辺境に生きる人びとであっても、国家政策や商品経済の影響をまったく受けていない人はいないであろう。自然に強く依存してきた人びとは、自然保護区の設立や紛争の勃発にともなう住民の居住地移動、ブッシュミートの需要の増大にともなう密猟者の流入や肉の商品化、自らの土地権を政府に主張する先住民運動など、新たな環境変化に直面している（池谷編, 2003）。

この報告では、筆者が1987年以來現在までの約20年間において、南部アフリカのカラハリ狩猟採集民の生活を対象にして、どのように生態人類学をとらえ、その研究枠組みを変えてきたのかを紹介する。つまり、変貌するアフリカと同時に筆者の生態人類学も変貌してきたのである。その結果、生態人類学と隣接諸学とがますます密接な関係をもつようになってきた。これまで世界的に見てもカラハリ狩猟採集民を対象にした生態人類学の研究の蓄積は大きい、まさに世界の研究者も「開発」、「環境」、「運動」などを正面にすえた研究を精力的に展開するようになってきている。

2. 研究視角への模索：生態、歴史、政治

2.1. 生業活動の文化生態

生態人類学では、生業様式がもっとも基本的な問題であり、生業様式は食物獲得のための集団・活動・技術から構成される（田中, 1984）。例えば、狩猟採集民の場合には、狩猟採集が基本的な生業様式であるといわれ、カラハリの場合、弓矢猟、畏猟、騎馬猟などの狩猟が特に注目されてきた。しかし、狩猟採集民研究では、狩猟採集に目をうばわれすぎて、彼らの行う農耕や家畜飼育はあまり注目されてこなかった。

そこで筆者は、当初、先行研究のほとんどない犬を使っている狩猟のほかに、それまで直接観察の行われなかった騎馬猟、および農耕や家畜飼育を対象にした参与観察を進めていった（池谷, 2002）。ここで、徹底的な参与観察が生態人類学では最も重要であることを指摘したい。例えば、現地では4-5泊の狩猟行がおこなわれているが、それを体験することで対象への認識が大きく異なっていく。猟に参加する個々の犬の性格であるとか、動物の足跡の読み方であるとかが深くみえてくる。のちに歴史や政治の側面の調査においても、意外にもこの時点での見方が研究をすすめるうえで有用なのである。

2.2. 生業活動の歴史生態

これまで、現存する狩猟採集民の生業は、古来以來変わらない固有の本質があり、それが過去の復元につながると想定された。しかし、1980年代に狩猟採集民の歴史に対する関心が高まり、歴史の中で生業がつくられていくという視点が生まれ、前者と後者とのあいだで「カラハリ論争」と呼ばれる議論が活発になった（池谷, 2002）。現在においても、この論争は決着がついていない。

筆者の場合では、犬猟や罟猟は「伝統的な生業」であると思っていたが、過去において現地での毛皮の需要が増大することによってより発達するものであることがわかってきた。このため、国立古文書館にて地域の文字・写真資料を収集する一方で、古老からの聞き取り調査をすすめて過去の狩猟形態を復元することに努めた。その結果、イギリス保護領ベチウナランドの時代にジャッカルの毛皮による毛皮が徴税や交易のために使われていたこと、当時は犬が首長国のチーフから与えられたり、銃が使用されていたことが明らかになった。このように、「歴史のなかでの生業」という視点は、自然と人の関係は不変であるという、筆者の間違った仮定を修正してくれるうえで不可欠なものになったのである。

2.3. 生業活動の政治生態

現代のカラハリ狩猟採集民は、国家のなかで生きている。国家による定住化、狩猟の禁止、自然保護区の設定により大きな影響を受けている。筆者の場合、最初に訪れた1987年には、中央カラハリ動物保護区内に位置する調査地にはすでに小学校や診療所が建設されており、地域の中心地になっていた。当時の村の人口は、約600人を示す。このため、国家政策やNGOの活動の影響を強く受けて、道路工事や民芸品生産への従事という生業の多様化が進んでいた。飲酒のからんだ殺人事件も生じている。

しかし、1997年に政府により保護区内での自然と人との共存は難しいということになり、保護区外への移住がすすめられて保護区内の住人の移住がすすむ。この結果、調査地のひとつは廃村になった。住民は、人口が1500人を超える集落のなかで指定された区画に暮らすことを余儀なくされたのである。

その一方で、筆者のもうひとつの調査地では、移住政策に反対するというまったく異なる対応をした。村人のなかには、ファースト・ピープルという先住民組織のメンバーとして、先住民としての土地権などを政府に要求する人びとが生まれてきた。この活動は、ヨーロッパに本部のある国際NGOに支援されており、これらの構造を把握するにはよりグローバルな視点が必要になったのである。現在、地域住民の多様な対応、国家やNGOの動向、そして世界の動きも強く連動しており、地域の問題を正しく把握するには多面的な視角が不可欠である。また、移住をすすめる政府から調査許可証をもらっている身として、どのようなポジションを調査者はとるのかが問われている。

このように、現代アフリカの狩猟採集社会を対象とする生態人類学では、これまでの生態や歴史の研究枠組み

を維持しながらも、新たに国家という枠組みを無視することはできなくなっている。

3. アフリカから世界への発信：自然保護区と地域社会とのかかわり

近年、生物多様性の保護という考え方が地球全体に広まるにつれて、地球のあちこちで自然保護区が増えている。世界遺産の中の自然遺産指定区、世界各地の国立公園、動物保護区、森林保護区など、自然保護区を意味する名称はさまざまである。また、世界の自然保護区の面積は、1997年に地球全土の6.4%、2003年には10%と急増している。現在、国立公園や保護区は6万8000ヶ所以上あり、今後ますます増えるものと推定される。

アフリカにおいては、ガボンのような国では次から次へと新たな国立公園が指定される。その一方で、旧イギリス植民地では人の存在を許さない国立公園のほかに自然と人との共存を認める動物保護区（ゲームリザーブ）という概念がつくられていたが、現在、ケニアやボツワナではその中身は国立公園のようにになっている。筆者の調査地もまた、1961年に狩猟採集民の生活を保護するために植民地政府によって中央カラハリ動物保護区が指定されたが、上述のような新たな移住政策がすすめられている。

しかし、生態人類学の立場から、はたして保護区内での自然と人との共存は不可能であろうか。地域での狩猟の生態、狩猟の歴史の研究のうえで、国土利用のための新たな土地利用モデルはつくれないものでしょうか。現在、これまでのマイクロな調査で集積された資料を国家レベルのマクロな問題にどのように接合したらよいか問われている。このためには、調査地での自然と地域社会とのかかわり方を一般化して、他の地域の実態との比較が必要である。すでにわが国では、同様な問題意識でのエチオピア、ケニア、タンザニア、カメルーンなどでの事例も集積しているため、アフリカ内での比較検討は可能である。しかし、この問題は、アフリカを越えて世界の自然保護思想のグローバル化などに連動している問題であるため、日本の事例も含めて世界的な視野で検討をするうえで格好のテーマになっている。

以上のように、カラハリ地域の事例は個別のものとしては人類学的研究に貢献するものであるが、アフリカ全体のなかに位置づけ、さらには世界の動向とどのように連動するのかという視点によって、ふたたびカラハリ地域の特性がより把握できるものなのである。

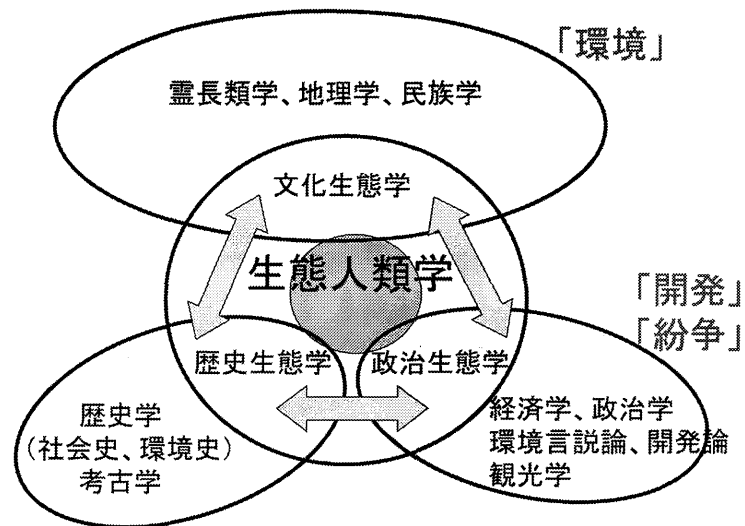


図1. 生態人類学と隣接分野との関係

4. 21世紀における生態人類学の方向

筆者の生態人類学のスタンスとは、文化生態、歴史生態、政治生態という3つの枠組みを使用しながら、状況に応じて統合して自然と人とのかかわりを把握することで現代アフリカの問題にアプローチすることである。現在、自らのスタンスをつくるために試行錯誤を繰り返しているが、今後の生態人類学の方向として、以下のよう

(1) 新たなフィールドの開拓と展開

わが国におけるアフリカを対象にした生態人類学には、初期の段階において、狩猟採集民サン（ブッシュマン）とピグミー、牧畜民レンディーレとトゥルカナ、焼畑農耕民トゥングェ、ベンバなど、フィールドの開拓があることを忘れてはならない。もちろん、それらの長期にわたる継続調査というのは必要であるが、内向きになることなく世界の動向をみすえて新たなフィールドを切り開かなくてはならない。筆者の場合、内戦終了後のアンゴラ南部のカラハリ狩猟採集民に強い関心を持っているが、同時にドイツの研究者などもフィールドワークを始めているという状況である。

(2) 方法論への模索

筆者による生態人類学は、生態、歴史、国家という研究枠組みの展開をしてきて、対象の変化に応じてますますその視角を多様化せざるをえなかった。さらに、それらを組み合わせる方法は、アフリカ地域研究の方法の模

索にも通じるものである。しかし、いずれの場合にも生業活動の参与観察の方法は有用であり、やはり、そこにこそ生態人類学の原点があるといつてよいであろう。

筆者は、冒頭でも述べたが、今後、生態人類学と諸学との統合がますます重要になってくると考えている。図1は、生態人類学の3つのサブ分野である文化、歴史、政治と隣接分野との関係を示した試案を示す。現代アフリカのかかえる問題に生態人類学はどのように対応していくのか、その戦略を議論しなければならない。

(3) 世界のなかのアフリカ

これまで日本の生態人類学は、1970年以降、アフリカのほかには、日本やオセアニア（とくにパプアニューギニア）などを重点地域として展開してきた。35年が経過した現在、世界の動向は大きく変化してきている。グローバル化する経済、国境を越える移民の増大、紛争や環境をめぐる問題など、生態人類学の対象としてはますます遠い存在のようになってきているようにも思える。内戦中で開発が浸透されていなかった地域などを除いて、生態人類学の本来の対象は失われてきた感もある。

狩猟採集民と密猟者、牧畜民と難民、農耕民と開発者などの問題は、アフリカ地域だけに特有の現象ではないが、現代アフリカを対象にする生態人類学の大きな課題であるといわなければならない。同時に、アフリカの生態人類学の知見を中心として自然と人類とのたゆまない相互作用からつくられる「地球環境史の構築」も課題として残されている。

参考文献

- 池谷和信, (2002)『国家の中での狩猟採集民』, 国立民族学博物館
研究叢書 4, 千里文化財団.
- 池谷和信編, (2003)『地球環境問題の人類学』, 世界思想社.
- 田中二郎, (1984)「生態人類学」, 綾部恒雄編『文化人類学の15
の理論』中央公論社, pp. 183-201.